

教員養成学部生における進路探索行動と意思決定の関連 —— 11月時点の3年次生を対象に ——

若松 養亮

Career Exploration and Career Decision Making in Faculty of Education

—— Data of Junior Undergraduates in November ——

Yosuke WAKAMATSU

問題と目的

大学生が行う進路意思決定は、多くの場合に職業選択と関わることから、それまで経験した進学先の選択とは異なった難しさがある。すなわち、職業は進学先のように偏差値等の指標で一次的にランク付けされていないこと、無数と言ってよいほどの膨大な選択肢が存在すること、選択の結果はその人自身の人生や生き方と長い年月にわたって関わること、そして情報が得にくい部分や偶発的に決まる部分が多いことから意思決定の判断材料が揃えにくいといった難しさである。そのうえ大学生は、社会・経済・産業・労働の実態や現実を知っているとは言い難い。たとえば就職前と数年後に面接調査を行った若松（1993・2000）は、彼らが「消費者（サービスを受ける側）の視点」で選択を行っていると結論づけており、また下村（2005a）は、多くの大学生は就職を自己実現的な考え方でしか考えることができないと述べている。

したがって上首尾な進路意思決定を行うためには、自分自身を正確に評価したり、周囲から情報を収集する「進路探索行動」が不可欠である（Jordaan, 1963; Chickering, 1969; Harren, 1979; Stumpf, Colarelli & Hartman, 1983）。本研究で対象とした教育学部生の多くが目指す

教職においても、たとえそれを念頭に入学してきても、教育実習や子どもと接した経験や見聞した情報をもとに、改めて志望を吟味・検討し、確信することが重要である。これは、青年期の心理社会的な発達課題である自我同一性の確立に「危機」と呼ばれる、自己の信念や価値を改めて問い直される経験が必要であるという Erikson（1950）の理論からも言えることである。

これまでの研究で、進路探索行動は、キャリア選択や適応の行動と関連が指摘されてきた。例えば職業選択への自信（Jepsen, 1975）、職業的成熟（Youngue, Todd, & Burton, 1981）、職業上の好みとの適合（Grotevant, Cooper, & Kramer, 1986）などである。しかし他方、関連が見いだされなかった研究もある。例えば興味の収束との関連が見いだされなかったり（Buck, 1970）、職務満足やキャリア遂行行動と負の関連があった（Jordaan & Super, 1974）などの報告もある。

これらの整合しない結果を Blustein（1989）は、探索行動を一次的なものとしているためではないかと考察している。例えば初期の尺度である Vocational Exploration Behavior Checklist（Krumboltz, 1964）では、探索行動の次元による測定ができていなかった。あるいは Buck（1970）では自己評価に関連した側面

が重視されておらず、専ら情報収集の活動として定義されてきていた。しかしその後、尺度は多次元的なものとなり、近年では潜在的に関わる認知的なものも含められている。例えば Stumpf & Lockhart (1987) や Blustein (1989) などでは、どんな探索行動が有効かという個人を特徴づける信念も、その指標としている。このように多次元的なものと捉えることで、例えば Blustein (1989) が指摘したように、意思決定の段階によって異なる探索行動が使われることが明らかになっている。例えば自分についての探索は意思決定の早い段階で行い、外的な環境の探索は働く世界と自己の関係づけがわかってから、といったようにである。

本研究では、このような研究の流れを踏まえて、教育学部生の進路意思決定に、進路探索行動がどのように関わるかを明らかにすることを目的とする。例えば若松 (2001; 2004; 2005) では、教育学部生の進路未決定（意思決定の遅延）を取り上げてきたが、未決定と進路探索行動の関連は、Greenhaus, Hawkins, & Brenner (1983) が、あまりはっきりとはないが関連がみられることを指摘した。確かに意思決定が遅れている学生が、できるだけ早く決めようとすると、理想的には、やはり探索行動は不可欠と言えるであろう。本研究では、単に決定済みか否かだけでなく、意思決定への評価や未決定者におけるその進行状況との関連も検討することで、進路探索行動の効果を検討する。なお教育学部生を対象としたのは、これまでの筆者の研究から一定の知見と尺度の蓄積があること、進路先が多様な文科系学部のみならず比較的一般的な進路が期待できること、そして先にも述べたように、教員を進路として想定している学生においても理想的には探索行動が必要であると考えられるからである。なおこれと関わって、若松 (2004; 2005) でその重要性が指摘された、「卒業後の進路として教職を想定しているか」(以下、教職の想定) による違いも検討する。

また、同じく若松 (2001; 2004; 2005) では、「意思決定における困難さ」を7因子の構造から成るものとして検討しているが、これと探索行動との関連は、正負両方向が考え得る。すなわち「探索行動によって、悩まされていた困難

さが解決・解消した」のであれば、探索行動の頻度と困難さに悩まされる程度が負の関連を示すが、「悩んでいない人は探索行動もしない」、「探索行動を起こすのは、悩んでいるからこそ」(Jordaan & Super, 1974)、あるいは「探索行動を起こしたが、(まだ) 解決できない」のであれば、両者は正の関連を示すことになる。本研究は一時点の調査であることから時間的な変化は観察できないため、因果関係の同定は難しいので、まず相関関係を検討することから始める。

本研究の対象となった学生は、意思決定の遅延を示しているとしても、多くの場合は undecided 型と呼ばれる、それほど重篤なケースでないことが想定される。これは、重篤なタイプである indecisive 型とは異なり、理知的・認知的問題 (Salomone, 1982) を抱えるにとどまっていることから、探索行動は未決定を解決・緩和することと関わっていることが期待される。

方 法

1. 調査の概要

本学部の3年次生が出席を義務づけられている11月上旬の就職講座において、質問紙を一斉配布し、終了時に回収を行った。本報告では、2000～2002年の3回にわたって収集されたデータをひとまとめにして分析した結果を示す。これらの3年分をまとめて分析することの妥当性は、すでに若松 (2004; 2005) において検証している。その有効回答数は572名（うち女子389名）で、ゼロ免課程（情報課程；2002年度のみ環境教育課程が加わる）の学生は内数で190名（33.4%）である。

2. 質問紙の構成

調査年度によって設問や項目の追加・変更があるが、基本的には3回の調査間でほとんど変わらない内容である。本報告の分析に用いられた設問は以下の通りである。

(1) 決定・未決定の定義

Zener & Schnuelle (1976) の指標を改定したものを用いた。まず ① 考慮している選択肢を6つまで挙げさせ、さらに ② 前問で書

いた選択肢のうち、「この進路なら目指すと決めてもう迷わないし、具体的に詰めるつもりがない選択肢はありますか（他にまだ迷っている選択肢があってもかまいません）」と教示し、1つ以上挙げた人を決定者と見なした。なお上記の「具体的に詰める」の箇所※印が付けられ、「例えば銀行と決めたら、どんな銀行を目指すか、どんな職務を希望するかなど、もっと細かく考えていくことです」という注釈が付けられた。なお、この時期までに決めていない学生を問題ある進路未決定者として考えるのは、就職協定の廃止に伴って就職活動の時期が3年生の後半にまで前倒しになっていること（永野、2004）からである。都筑（印刷中）によれば、3年生の11月時点では学生の4分の3が進路希望先を決定し、そこで決定された進路先はその後継続して希望されることが多いとのことであるので、研究対象としての未決定者を峻別するに妥当な時期であると言える。

（2）教職の想定

前項の決定・未決定を分ける問い①に回答した選択肢のなかに教職（幼・小・中・高・養護のいずれか）が含まれていれば、決定者・未決定者にかかわらず、進路として教職を想定している人（以下、教職想定者）とした。

（3）進路探索行動

Stumpf et al. (1983) の Career Exploration Survey から 'Exploration Process' のカテゴリーに入る項目のうち、未決定の人には答えにくく、また探索行動というよりは探索の成果を表現している No. 31（「自分の将来の進路とこれまで自分がしてきたこととの関連を新たに見いだした」）を除いた13項目（TABLE 1参照）を翻訳して使用した。Stumpf et al. (1983) の尺度は、他に 'Reactions to Exploration' と 'Beliefs' の2カテゴリーがあるが、本研究では使用しなかった。これらは具体的な探索行動ではなく心理変数であるために、本研究でとりあげる変数と同義反復になることを避けること、およびできるだけ未決定との因果関係を考察するため、探索の経験を問うことを重視したためである。教示は、原典では「過去3ヶ月に」であったが、決定者にも問うことを考慮し、「これまでにどのくらいありましたか」と

尋ねた。回答は、「5. 何回もした」、「4. けっこうした」、「3. まあまあした」、「2. 少しした」、「1. ほとんどしなかった」の5件法である。

（4）未決定者の状態

未決定者が興味ある選択肢を既に持っているのか否かなど、意思決定がどこまで進み、どこで停滞しているのかを見る設問で、探索行動との関連をみるために用いた。質問項目は、Gati Krausz & Osipow (1996) の CDDQ (Career Decision-making Difficulties Questionnaire) に含まれていた項目を参考にして作成した。(1)の設問で判定された未決定者を対象に、「あなたは現在、進路を考えたり決めたりする過程の、どんな段階にいるのでしょうか」と尋ね、回答は○か×で回答する2件法である。年度間で項目の構成・表現に僅かな差異があるが、若松(2004)で報告された、複数年の調査に共通する項目のうち、本論文では該当率の偏りが大きくない以下の4項目を分析に用いた。

1. 現実的で、しかも興味が持てる選択肢が1つ以上ある。
2. 今考えている他には、新しい選択肢をできるだけ付け加えないで、この中から考えたい。
4. 私が今考えている選択肢は、場合によっては全部併願しながら、就職活動や試験の準備を始めてもかまわないものだ。
7. 例え自分の中でほぼ決心がついている選択肢があっても、それを目指すとはまだ時期的に早いと思う。

（5）決定した経緯

決定者がどのようにして決めたかを見る設問で、探索行動との関連をみるために用いた。質問項目は若松(2004)で用いた8項目で、(1)の設問で判定された決定者を対象に、「あなたがその進路を『もう迷わない』と思えたのは、どのような事情やいきさつがあったからでしょうか」と教示し、(4)の設問と同様に○か×の2件法で答えさせた。本論文では複数年の調査に共通する項目のうち、該当率の偏りが大きくない以下の6項目を分析に用いた。

1. それほど強く惹かれる選択肢ではなかったが、現実的な進路として、妥協して決めた。

2. 「これはどうしても志望したい」という選択肢だったので、決めた。
3. 「もう決意しなくては準備の時間が足りなくなる」と思って決めた。
4. 不安または不満な点はあったが、他の選択肢と比べて総合的に良い方だと思えたので決めた。
6. 不安または不満な点はあったが、それ以上に魅力に感じる点があったので、それに惹かれて決めた。
7. その選択肢について以前から気になっていたことが解決したり、ぜひ知りたいと思っていたことがわかったので決めた。

(6) 快適さ (comfort)

Career Decision Profile (Jones, 1989) において同名の指標として作成された2項目を翻訳し、探索行動との関連をみるために用いた。質問項目は、①「私は自分が今まで進路について考えてきたことや決めてきたことに納得しており、すっきりした気持ちでいられる」、②「私は自分の進路選択について心配していない」の2項目であり、①を納得感、②を非心配感と呼ぶ。評定はオリジナルと同様に、8段階の両端にのみ「8. 全くそう思う」と「1. 全くそう思わない」という評語を付し、2から7までは数字のみのスケール上に回答させた。

(7) CDDQ-R 尺度

未決定時に有する困難さを測定する尺度で、探索行動との関連をみるために用いた。質問項目は、Gati et al. (1996) のCDDQに改定を加えたCDDQ-R (若松、2001; 2004; 2005) の

40項目を使用した。本報告では、若松 (2004; 2005) が示した7因子構造に基づいて、その因子得点を使用した分析を行っている。その7因子とは順に、I「能力に関する戸惑い」($\alpha = .926$)、II「適合へのこだわり」($\alpha = .882$)、III「興味や好みの模索」($\alpha = .879$)、IV「選択方法に関する迷い」($\alpha = .866$)、V「進路先の実情への不安」($\alpha = .810$)、VI「現実的な障害」($\alpha = .726$)、VII「実現可能性への不安」($\alpha = .715$)である。未決定者には「あなた自身は現在、進路を選ぶに際して、次のそれぞれの問題にどのくらい悩まされていますか」、決定者には「……どのくらい悩まされましたか」と意思決定以前について尋ねた。評定は「6. すごく悩まされている」、「5. だいぶ悩まされている」、「4. わりと悩まされている」、「3. あまり悩まされていない」、「2. ほとんど悩まされていない」、「1. 全然悩まされていない」(決定者向けには「悩まされた」と過去形にした)の6件法である。なおこの尺度は、若松 (2001) において、構成概念妥当性および信頼性が確認されている。

結 果

1. 進路探索尺度の因子構造と頻度の分布

進路探索行動尺度の回答の主成分分析解にプロマックス回転を施した結果、固有値1.0をきる3因子解が解釈も容易で、原典に類似した区分であったので、これを採用した。この因子パターンをTABLE 1に示した。因子1は原典の

TABLE 1 進路探索行動尺度の因子分析

質問項目	1	2	3	h ²
7. 自分のこれまでのことについてじっくり考えてみた	.993	-.046	-.112	.852
4. 自分は一人の人間としてどういう人間なのかをじっくりと考えてみた	.916	-.144	.012	.735
10. 自分の進路を考えるために、これまでしてきたことや考えてきたことを振り返ってみた	.884	-.010	-.011	.764
2. 私のこれまでのことが自分の将来の進路とどのように結びつくのか考えてみた	.573	.231	.023	.534
6. 特定の職務や会社について情報を手に入れた	-.129	.884	-.089	.624
1. 自分が進める進路にはどういうものがあるか調べてみた	-.015	.834	-.038	.654
11. 今の自分の進路からはどんな職種にどのくらいつけそうかを情報を集めてみた	-.015	.797	.028	.645
13. 興味がある進路の特定の領域について情報を探した	.076	.769	-.003	.653
12. ある役割を好きになれるか、試しにその仕事についてみた	-.170	-.208	.987	.717
5. 進路の方向を考えるのに役立つような催しものいろいろ出かけた	.031	.195	.601	.540
9. 自分と同じ学部・専門の人で進路のことをよく知っている人と話を始めた	.181	.060	.469	.377
8. 自分が持っている技能を發揮できる機会を探した	.368	.072	.415	.519
3. さまざまな進路での活動を試してみた	.042	.337	.361	.394
因子間相関	1	.510	.489	
	2		.490	

「自己の探索」に相当したことから「自己内省」因子 ($\alpha = .87$)、因子2は原典の「職業世界の探索」の項目が主であったことから「情報収集」因子 ($\alpha = .82$)、因子3は原典の「意図的・系統的な探索」が主であり、「外的活動」因子 ($\alpha = .70$) と命名した。

続いて、それぞれの因子に高く負荷した項目の評定平均を算出し、Fig. 1～3にその分布を示した。ただし因子3（外的活動）については α 係数が十分に高くないため、参考として算出した。因子1（自己内省）は正規分布に近いが、因子2（情報収集）と3（外的活動）は、頻度が少ない方に偏っている（歪度はそれぞれ.578と.893）。

2. 決定者と未決定者の比較

決定者群と未決定者群それぞれにおける探索行動の因子得点平均と評定平均の双方をFig. 4に示した。すべての因子で決定者群が未決定者群に比べて高い頻度で探索していた。評定平均をみると、因子1（自己内省）こそ両群の平

均が2.5を越えるが、因子2（情報収集）、因子3（外的活動）は決定者においても3.0を下回っており、未決定者においてはどちらの因子も評定平均が2.0を下回るという低さであった。これをさらに教職の想定・非想定でも分けて比べたのがFig. 5である。この結果に対して2要因の分散分析を行った結果がTABLE 2である。すべての探索行動で決定者が未決定より因子得点の平均が高かった。教職想定の主効果もすべての探索行動について有意となったが、その差は一様ではなく、決定者では因子2（情報収集）において、教職非想定群の平均が想定群

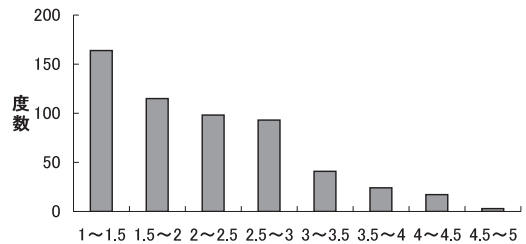


Fig. 2 因子2「情報収集因子」項目の評定平均

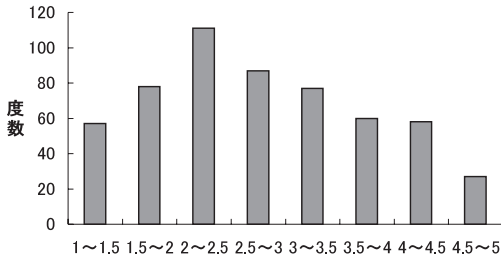


Fig. 1 因子1「自己内省因子」項目の評定平均

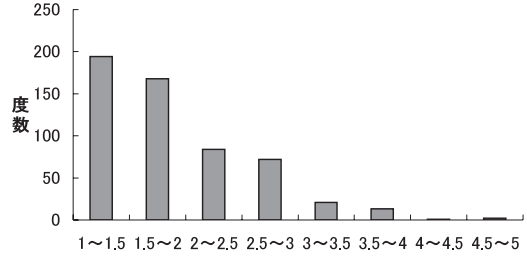


Fig. 3 因子3「外的活動因子」項目の評定平均

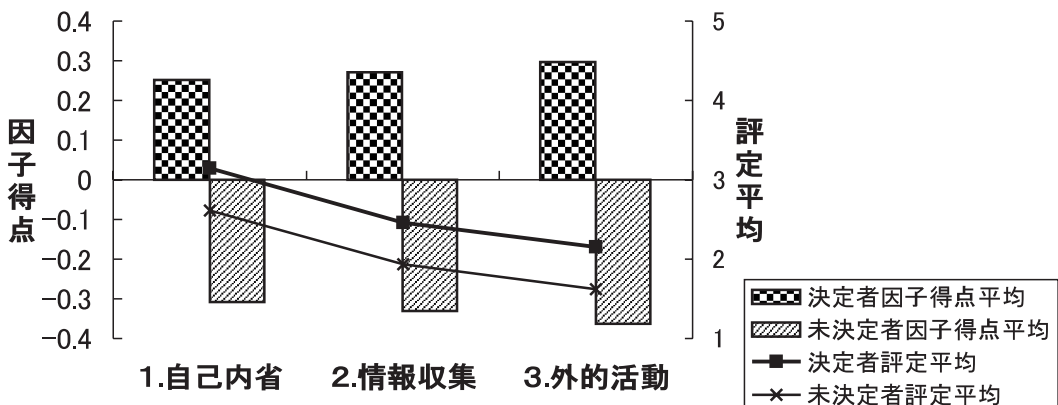


Fig. 4 決定者・未決定者間の探索行動頻度比較

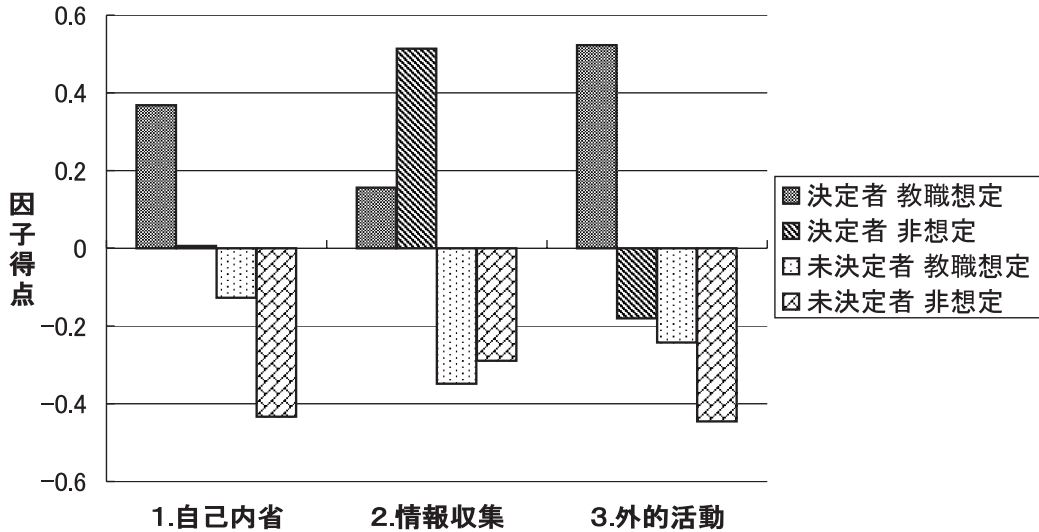


Fig. 5 決定・未決定×教職の想定・非想定者別にみた探索行動

TABLE 2 決定者・未決定者×教職の想定・非想定による分散分析

		1. 自己内省	2. 情報収集	3. 外的活動
決定者	教職想定 (201)	0.37 (.97)	0.16 (.99)	0.52 (1.09)
	非想定 (95)	0.01 (.99)	0.51 (1.06)	-0.18 (.90)
未決定者	教職想定 (94)	-0.13 (.95)	-0.35 (.82)	-0.24 (.82)
	非想定 (133)	-0.43 (.88)	-0.29 (.86)	-0.45 (.68)
決定・未決定の主効果		F(1, 519) = 29.2 ***	F(1, 519) = 57.1 ***	F(1, 519) = 37.5 ***
教職想定の主効果		F(1, 519) = 14.8 ***	F(1, 519) = 5.8 *	F(1, 519) = 29.1 ***
交互作用		F(1, 519) = 0.1 n. s.	F(1, 519) = 2.98 +	F(1, 519) = 8.88 **

※F値以外の欄の数値は平均値と標準偏差

+p < .10 *p < .05 **p < .01 ***p < .001

※教職想定、非想定各群に続く括弧内の数値は人数

TABLE 3 未決定者の「状態」4項目の数量化Ⅲ類・第1成分のカテゴリースコア

質問項目 (略記; 回答に応じて文末を変更済み)	カテゴリースコア
1 - 現実的で、しかも興味が持てる選択肢が1つもない	-2.152
4 - 全部併願しながら、就職活動や試験の準備を始めるのはいや	-1.264
2 - 新しい選択肢を付け加えないでこの中から考えるのはいや	-0.631
7 + 例えほぼ決心がついても、決めてしまうのはまだ時期的に早い	-0.401
7 - ほぼ決心がついたら、決めてしまうことは時期的に早くない	0.269
4 + 全部併願しながら、就職活動や試験の準備を始めてもかまわない	0.621
1 + 現実的で、しかも興味が持てる選択肢が1つ以上ある	0.910
2 + 新しい選択肢をできるだけ付け加えないで、この中から考えたい	1.823
固有値	0.308

※項目番号に付した+は肯定の回答を、-は否定の回答を示す。

より高く、交互作用も有意傾向を示した。他の2因子においては、教職想定群が非想定群より高かった。

3. 意思決定の進行度ならびに本意度との関連
進路意思決定過程との関連を分析する量的な指標を得るために、まず未決定者に現在の状態

を尋ねた4項目の回答に対して数量化Ⅲ類を施した結果をTABLE 3に示した。ここに示した第1成分は、符号が正のカテゴリースコアの極に意思決定が相対的に進んでいる旨の回答が集まり、負の極に進んでいない回答が集まっていることから、この成分を「未決定者の進行度」(以下、「進行度」と命名した。

TABLE 4 決定者の「経緯」項目の数量化Ⅲ類・第1成分のカテゴリースコア

質問項目 (略記; 回答に応じて文末を変更済み)	カテゴリースコア
4 - . 他よりも総合的に良いと思えたので決めたのではない	- 1.156
3 - . 「準備の時間が足りなくなる」と思って決めたのではない	- 0.808
2 + . 「これはどうしても志望したい」という選択肢だったので、決めた	- 0.690
1 - . 強く惹かれぬ、現実的な進路として妥協をして決めたのではない	- 0.588
7 + . 気になっていたことが解決/知りたいことがわかったので決めた	- 0.581
6 + . 不安・不満はあったが、それ以上に魅力に感じたので決めた	- 0.165
7 - . 気になっていたことが解決やわかったので決めたのではない	0.278
6 - . 不安・不満はあったが、それ以上に魅力に感じて決めたのではない	0.487
4 + . 不安・不満はあったが、他よりも総合的に良いと思えたので決めた	1.088
3 + . 「もう決意しなくては準備の時間が足りなくなる」と思って決めた	1.393
2 - . 「これはどうしても」という選択肢だったので、決めたのではない	2.416
1 + . 強く惹かれなかったが、現実的な進路として妥協をして決めた	2.905
固有値	0.298

※項目番号に付した+は肯定の回答を、-は否定の回答を示す。

TABLE 5 進行度・不本意性と進路探索行動の関連をみた重回帰分析

	進行度 (未決定者)	不本意性 (決定者)
I. 自己内省	.06 n. s.	.04 n. s.
β II. 情報収集	.16 *	- .06 n. s.
III. 外的活動	.08 n. s.	- .16 *
R	.241 **	.180 *

* $p < .05$ ** $p < .01$

また決定者に意思決定の経緯を尋ねた6項目の回答に対する数量化Ⅲ類の結果をTABLE 4に示した。ここに示した第1成分は、正のカテゴリースコアの極に妥協や時間的切迫によって決めた旨の回答が集まり、負の極が本人の意思で決めた旨の回答が集まっていることから、この成分を「決定者の不本意性」(以下、「不本意性」と命名した。

未決定者が対象の「進行度」、および決定者の「不本意性」の指標を目的変数、3種類の探索行動の因子得点を説明変数とした重回帰分析を行い、結果をTABLE 5に示した。進行度は因子2(情報収集)と有意な正の、また不本意性は因子3(外的活動)と有意な負の標準回帰係数(以下、 β)を示し、重回帰式はいずれも有意であった。進行度が高い未決定者は情報収集行動をより頻繁に行っており、本意性が高い決定者は外的活動をより頻繁に行っていることが示された。

4. 快適さ評定との関連

決定者・未決定者別に、快適さの項目ごとの

TABLE 6 快適さ評定と進路探索行動の関連をみた重回帰分析

	快適さ① (納得感)	快適さ② (非心配感)
β 未決定者	1. 自己内省	- .163 *
	2. 情報収集	.098
	3. 外的活動	.190 **
R	.230 **	.120
β 決定者	1. 自己内省	.117 +
	2. 情報収集	- .070
	3. 外的活動	.183 **
R	.232 **	.187 *

+ $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

評定を目的変数とした重回帰分析の結果をTABLE 6に示した。未決定者においては、因子1(自己内省)が納得感に対して負の β を示した。自己内省をするほど納得感が低く、また納得感が低い人は自己内省をするという結果が弱いながらも確認された。他方因子3(外的活動)は①(納得感)に対して正の β を示した。

一方、決定者においては、因子2(情報収集)は②(非心配感)に対して負の β を示し、因子3(外的活動)は、双方の快適さに対して正の β を示した。

5. 困難さとの関連

まず探索行動因子得点と、困難さの各因子得点の相関係数を算出し、TABLE 7に示した。総じて関連は弱く、有意な組み合わせも少ない。関連が有意な部分は、未決定者においては負の相関、決定者においては正の相関が目につく。また有意な関連は探索行動の因子2(情報収

TABLE 7 探索行動因子得点と困難さ因子得点の相関係数

	I. 能力に関する戸惑い	II. 適合へのこだわり	III. 興味や好みの模索	IV. 選択方法に関する迷い	V. 進路先の実情への不安	VI. 現実的な障害	VII. 実現可能性への不安
未決定者							
1. 自己内省	-.002	-.032	-.046	-.083	.000	-.016	.054
2. 情報収集	-.078	-.042	-.157*	-.178*	.061	.003	.021
3. 外的活動	-.153*	-.146*	-.240**	-.135	-.036	-.129	-.131
決定者							
1. 自己内省	.074	.055	.027	-.038	.120	.015	.029
2. 情報収集	.041	.018	.106	.073	.095	.172*	.139*
3. 外的活動	.002	.086	-.081	-.050	.028	-.023	-.144*

* $p < .05$ ** $p < .01$

TABLE 8 探索行動の因子得点から困難さに悩まされている程度を予測する重回帰分析（未決定者）

	I. 能力に関する戸惑い	II. 適合へのこだわり	III. 興味や好みの模索	IV. 選択方法に関する迷い	V. 進路先の実情への不安	VI. 現実的な障害	VII. 実現可能性への不安
1. 自己内省	.074	.016	.075	.008	-.016	.012	.096
2. 情報収集	-.037	.021	-.089	-.149+	.103	.071	.066
3. 外的活動	-.162*	-.154*	-.225**	-.070	-.077	-.164*	-.195**
重相関係数	.166+	.141	.253**	.188*	.096	.145	.179+

※各探索行動に対応する数値は標準偏回帰係数

+ $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

集)と因子3(外的活動)でのみ見られた。未決定者において「情報収集」と有意な関連が見られた困難さは、III「興味や好みの模索」とIV「選択方法に関する迷い」(いずれも負)、「外的活動」と有意な関連が見られた困難さは、I「能力に関する戸惑い」、II「適合へのこだわり」、III「興味や好みの模索」(いずれも負)であった。これらの困難さに悩まされていない人ほど、探索行動を行っていることを表す。他方、決定者において「情報収集」と有意な関連が見られた困難さは、VI「現実的な障害」、VII「実現可能性への不安」(いずれも正)であり、これらの困難さに悩まされている人ほど、探索行動を行っていることを表す。また「外的活動」と有意な関連が見られた困難さはVII「実現可能性への不安」(負)であり、探索行動を行っている人ほど悩まされていないことを表す。

次に、困難さに悩まされている程度を目的変数とした重回帰分析を行うにあたり、対象を未決定者に限定した。というのは決定者において見られた、困難さとの間に正の相関関係を示す結果には、「困難さに悩まされたために探索を行ったこと」が表れており、「どのような探索行動によって困難さが軽減するか」を検討するには、負の相関が見られた未決定者を対象とすることが妥当であると考えたからである。

重回帰分析の結果をTABLE 8に示した。総

じて重相関係数は低く、III「興味や好みの模索」とIV「選択方法に関する迷い」以外の困難さにおいては、重回帰式が有意にならず、探索行動が奏功していないことを示している。 β が有意になった探索行動は外的活動のみで、いずれも負であった。すなわち外的活動をする者ほど困難さを感じないことが明らかになった。その困難さとは、I「能力に関する戸惑い」、II「適合へのこだわり」、III「興味や好みの模索」、VI「現実的な障害」、VII「実現可能性への不安」であった。

考 察

まず探索行動の度数分布から、自己内省は正規分布的で、未決定者にもそれなりの頻度で見られるが、情報収集や外的活動では頻度が小さい方向への偏りが明らかになった。Greenhaus, Hawkins, & Brenner (1983)においても、ビジネスコースの1、2年生を対象とした米国での状況という違いはあるものの、本研究と共通する結果が見いだされている。すなわち、多くの項目が4~7割の経験率を示すなかで、「キャリア情報をもとめて機関を訪ねる」は19%、「自分のことを知るためにカウンセラーに会う」で29%、「自分のことを知るためにセミナーに出席する」が27%であるなど、自分

ひとりで考えこむ探索は行いが、具体的な行動を起こす探索はなされにくいと言える。確かに、自己内省的な活動は行動に伴うコストも小さいだけに、探索行動としては行われやすいことはうなずける。

次に、探索行動は未決定者が決定者においてよりも少ないことが明らかになった。決定までの過程を考えると一見当然の結果のようであるが、決定者は思いつきによって、あるいは、Marsia (1966) がいう「早期完了」的に決めている人が大勢を占めていないこと、未決定者は決まっていなくてもかわらず探索が少ないことを示唆する結果といえる。ただし、決定者においても情報収集因子や外的活動因子の評定平均の値は決して高くなく、また教員を進路として想定している人は教育実習や現職教員との交流など、探索行動の機会は半ば自動的に得られることを考慮すると、決定者においても十分な探索行動が行われているとは言い難い。

続いて探索行動の3因子を抽出し、諸変数との関連を検討すると、情報収集や外的活動は、進行度や本意性、快適さが高い意思決定と関連していた。今回の調査データでは因果関係が明らかにできないことから、情報収集によって進行度や本意性、快適さが高くなったとは言えない。たとえば未決定者のなかで進行度が高い人は、想定している選択肢がより気の進むものであるために、探索行動に動機づけられ、頻繁に行うといった逆の因果関係が考えられる。また進路選択への意識が高い人が、探索行動も頻繁に行い、進行度や本意性も高いという疑似相関もあり得るであろう。どのような因果関係があるかは今後の研究や実践で確かめるべき課題であるが、探索行動が意思決定を進める可能性が支持されたことは成果と言える。たとえばFig. 5の「情報収集」因子において、教職非想定決定者が、教職想定決定者よりも高い平均を示したという結果は、探索行動の成果として意思決定があることの傍証である。というのは、企業や公務員等の進路は教職と違って選択肢が無数にあり、また不明な部分が多いため、それだけ情報収集をしなければ意思決定が進まず、また意に叶う選択もできにくい、それと符合する方向で差が見られたからである。

ところで決定者において、情報収集活動が快適さ②(非心配感)と有意な負の関連を示したり、困難さのVI「現実的な障害」、VII「実現可能性への不安」に悩まされる程度と有意な正の相関を示したりといった、一見、探索行動の効果として理解しにくい結果が見られた。これらの結果のうち非心配感との関連は、探索行動が奏功しなかったことの表れとも見られるが、困難さについては、悩まされることが探索行動の契機となったことを示すものと見ることもできる。というのは、決定者に対しては、「進路を選ぶに際して、次のそれぞれの問題にどのくらい悩まされましたか」と教示しており、評定が必ずしも探索後に悩まされていた程度を示すとは限らず、探索に先だって悩まされていた程度も含めて回答されているからである。とくに未決定者における結果とは関連の指標が異符号であることから、その可能性も含めて、今後検討していく必要がある。

他方、未決定者における自己内省が快適さ①(納得感)と負の関連を示し、進行度とも関連が見られなかった。すなわちこの結果から、この探索行動が、それ単独では意思決定を進める効果はないことが推測できる。このように、探索行動の次元によって異なった関連が見られるために、複数の次元でそれを捉えることが重要(Blustein, 1989)であると言える。自己内省型の探索行動は、前述したように、3種類の探索行動中、最も手軽にできるものであるが、働いた経験のない者にとって、働くという文脈での自己理解は困難であることが推測できる。特に納得感を目的変数とした重回帰分析(TABLE 6)における標準偏回帰係数が負で有意になったことから、情報収集や外的活動も行わずに自己内省を行っても納得のいく進路の方向は見いだしにくいと言える。就職活動を指南する書籍やガイダンス等において、自己分析が進路選択や就職活動に占める重要性が強調されるだけに、なんとか確たる自己理解を行おうとする意向は理解できるが、他方、近年、自己分析から「自分探し」の迷宮に入り込む危険性が指摘されている(玄田、2004; 香山、2004; 小林、2004; 若松・下村・山田・佐藤・上瀬、2005)。下村(2005b)は進路が選べなくなるフリーターや

ニートの問題を、自己と社会のサイズの不釣り合いという問題として捉えている。すなわち自己分析を続けるうちに自己が肥大化して、社会にそれを収める場所が見いだせなくなるのがフリーターであり、自己の存在を矮小化し、社会全体に対して小さく見積もりすぎるあまりに、自分の居場所を社会に見つけられなくなるのがニートではないかと述べている。この論にしたがえば、学生が現実の社会に合った自己理解を行うには情報収集や外的活動を並行して行い、併せて検討する必要があると言える。TABLE 7～8の分析から、「能力」「適合」「興味」といった自己理解に関わる困難さが、外的活動の頻度と有意な関連を示したことも、自己内省以外の探索行動が自己理解を促進する可能性を示していると考えられる。

残る2つの探索行動である情報収集と外的活動においては、未決定者において、いくつかの困難さとのあいだに予想通り負の関連が示された。ただ、この負の関連を「探索行動をした人が悩まされない」という、未決定の緩和要因としての探索行動として解釈するだけでなく、「悩まされている人は探索行動ができていない」と見ることは重要であろう。たとえば、7種類のうち最も強い関連が示されたⅢ「興味や好みの模索」で考えると、「自分はどのような興味や好みがあるのか」という、進みたい進路の方向性が見えていない人は上記2種類の探索行動への動機づけが高まらず、結果的にその頻度は少なくなるであろう。Deci (1975) の認知的評価理論を援用すれば、進みたい進路の方向性が見えることで進路選択に対する自己決定感が高まり、探索行動への動機づけが高まると解釈することもできる。すなわち、上記の困難さに悩まされる人は探索行動をせずに悩んでいる可能性がある。特に「興味」の困難さとの負の相関は、S. C. C. T. (Lent, Brown, & Hackett, 2000) の理論が、興味が明確になることで目標が持て、進路選択の活動も進むことを示していることを考えると、示唆的である。若松 (2004) では、未決定者の多数派の状態像として、「選択肢はあるが、それには満足できないので、なお新たな選択肢を模索している」とまとめたが、これまで述べてきたことからすると、情報収集

や外的活動をあまり行わずにいる公算が強い。先の自己内省の弊害と併せて考えると、支援や介入において、情報収集や外的活動による探索行動を意図的に行わせることが必要となるであろう。

謝辞

本学部の就職講座での調査実施にあたり、当該年度の就職委員会の先生方、就職担当の事務の方々にご協力をいただきました。ありがとうございました。また回答にご協力いただいた学生のみなさまにもお礼を申し上げます。

引用文献

- Blustein, D. L. 1989 The role of career exploration in the career decision making of college students. *Journal of College Student Development*, **30**, 111–117.
- Buck, C. W. 1970 Crystallization of vocational interests as a function of vocational exploration in college. *Journal of Counseling Psychology*, **17**, 347–351.
- Chickering, A. W. 1969 *Education and identity*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- Deci, E. L. 1975 *Intrinsic Motivation*. New York: Plenum.
- Erikson, E. 1950 *Childhood and Society*. Norton & Company, Inc.
- Gati, I., Krausz, M., & Osipow, S. H. 1996 A taxonomy of difficulties in career decision making. *Journal of Counseling Psychology*, **43**, 510–526.
- 玄田有史 2004 自己実現疲れ、個性疲れの若者を支援せよ 論座 2004年8月号, 36–39.
- Greenhaus, J. H., Hawkins, B. L., & Brenner, O. C. 1983 The impact of career exploration on the career decision-making process. *Journal of College Student Personnel*, **24**, 495–502.
- Grotevant, H. D., Cooper, C. R., & Kramer, K. 1986 Exploration as a predictor of congruence in adolescents' career choices. *Journal of Vocational Behavior*, **29**, 201–215.
- Harren, V. A. 1979 A model of career decision making for college students. *Journal of Vocational Behavior*, **14**, 119–133.
- Jepsen, D. A. 1975 Occupational decision development over the high school years. *Journal of Vocational Behavior*, **14**, 119–133.

- Jones, L. K. 1989 Measuring a three-dimensional construct of career indecision among college students: A revision of the Vocational Decision Scale — The Career Decision Profile. *Journal of Counseling Psychology*, **36**, 477 – 486.
- Jordaan, J. P. 1963 Exploratory behavior: The formation of self and occupational concepts. In D. E. Super (Eds.), *Career development: Self-concept theory*. 42 – 78. New York: College Entrance Examination Board.
- Jordaan, J. P. & Super, D. E. 1974 The prediction of early adult career behavior. In D. F. Ricks, M. Roff, & A. Thomas (Eds.), *Life history research in psychopathology* (pp. 108 – 130). Minneapolis: University of Minnesota Press.
- 香山リカ 2004 就職がこわい 講談社.
- 小林道雄 2004 「個性」なんかいらぬ! 講談社.
- Krumboltz, J. D. 1964 The effect of behavioral counseling in group and industrial settings on information seeking behavior. *Journal of Counseling Psychology*, **11**, 324 – 333.
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551 – 558.
- 永野仁 2004 大学生の就職と採用 中央経済社.
- 下村英雄 2005 a 大学生の就職意識 —— 大学生という「子ども」の意識 IDE —— 現代の高等教育, 2005年2月号, 23 – 28.
- 下村英雄 2005 b 就職問題から示される新たな自己モデルへの期待 日本教育心理学会第47回総会自主シンポジウム「就職と自己 —— 自己分析という迷宮 ——」 日本教育心理学会第47回総会発表論文集, pp. S 44 – S 45.
- Stumpf, S. A., Colarelli, S. M., & Hartman, K. 1983 Development of the career exploration survey (CES). *Journal of Vocational Behavior*, **22**, 191 – 226.
- Stumpf, S. A. & Lockhart, M. C. 1987 Career exploration: Work role salience, work preferences, beliefs, and behavior. *Journal of Vocational Behavior*, **30**, 258 – 269.
- 都筑学 印刷中 大学生の進路選択と時間的展望 —— 縦断的調査に基づく検討 —— ナカニシヤ出版.
- 若松養亮 1993 大学生の進路意志決定の評価的研究 進路指導研究 **14**, 27 – 35.
- 若松養亮 2001 大学生の進路未決定者が抱える困難さについて —— 教員養成学部の学生を対象に —— 教育心理学研究 **49**, 209 – 218.
- 若松養亮 2003 進路選択の現状 現代のエスプリ No. 427 「フリーター」(至文堂) pp. 127 – 138.
- 若松養亮 2004 教員養成学部生における進路意思決定の遅延 —— 3回生11月時点での未決定の学生を対象に —— 滋賀大学教育学部紀要 I: 教育科学, **54**, 77 – 86.
- 若松養亮 2005 教員養成学部の進路未決定者が有する困難さの特質 —— 類型化と教職志望による差異の分析を通して —— 青年心理学研究, **17**, 43 – 56.
- 若松養亮・下村英雄・山田剛史・佐藤有耕・上瀬由美子 2005 就職と自己 —— 「自己分析」という迷宮 —— (自主シンポジウム) 日本教育心理学会第47回大会発表論文集, S 44 – S 45.
- Youngue, I. T., Todd, R. M., & Burton, J. K. 1981 The effects of didactic classroom instruction versus field exposure on career maturity. *Journal of Vocational Behavior*, **19**, 369 – 373.
- Zener, T. B., & Schnuelle, L. 1976 Effects of the Self-Directed Search on high school students. *Journal of Counseling Psychology*, **23**, 353 – 359.